

授業が育む 学びの基礎力

～ジェネリック・スキル教育の充実に向けて～



国立大学法人 愛知教育大学 教育創造開発機構

「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクト

目次

はじめに	3
目次	5
本書の目的・構成	6
1. 大学教育におけるジェネリック・スキル	7
1-1. ジェネリック・スキル（汎用的技能）とは何か	9
1-2. 愛教大生が修得すべきジェネリック・スキル	15
2. 授業を通して学生の「力」を育む	19
2-1. 土台力を育む：大学1年生の共通科目を受け持って	21
富山 祥瑞 教授担当「日本の社会と表現文化入門」	
2-2. 主体的思考力を育む：コミュニケーションを通して	35
土屋 武志 教授担当「平和と人権入門」	
2-3. 自然界のしくみを理解する：観察力を養い客観的事実に	47
基づく論理的考察力を伸ばす	
高橋 真聡 教授担当「地学Ⅱ〈天文分野〉」	
3. リベラル・アーツ Edu ワークショップ「対話型授業の実践」	65
対話力を育む	67
河野 哲也 教授（立教大学文学部教育学科）	
あとがき	81

2

授業を通して学生の「力」を育む

第2部では、1年生を対象とする共通教育科目の「日本の社会と表現文化入門」（富山祥瑞教授担当）、「平和と人権入門」（土屋武志教授担当）と2年生を対象とする教職科目「地学Ⅱ」（高橋真聡教授担当）の三つの授業をご紹介します。担当教員がそれぞれの授業において、どのような方法でどのような力を涵養しようとされているのかを授業の概要と共にまとめています。

2-1

土台力を育む

～大学1年生の共通科目を受け持って～



授業名：日本の社会と表現文化入門（共通科目：主題科目）

授業担当：富山 祥瑞教授（美術教育講座）

開講時期：後期・金曜1限

受講対象：1年生（約70人）

1. 授業の概要

カリキュラム上の位置づけ

本科目は、共通科目の教養科目のうちの主題科目です。主題科目には7つの柱があり、「日本の社会と表現文化」はその一つです。1年次にどの柱を学ぶのか、学生は必ず選択し、1年の後期に「入門」、2年の前期・後期で「展開1」「展開2」、3年の前期に「セミナー」を受講します。本授業は、「入門」にあたります。

「日本の社会と表現文化」の柱では、日本の社会と表現文化における諸問題に関する段階的学習を通して、幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することを目標としています。

入 門：教育学的、人文・社会的、芸術的な分野からアプローチし、基礎的な知識を理解するとともに幅広い教養を身につける。

展 開 1・2：「入門」で得た知識を基に、諸分野での研究方法や表現方法を学ぶ。

セ ミ ナ ー：「入門」「展開」を通して学生が抱いた問題意識や関心に基づいて、論文作成や創作・演奏の実践へと発展させる。

授業目標（平成23年度シラバスから抜粋）

これを読む大学生活が慣れてきた1年生後期のあなたにとって、授業の選択とは、とすると「（今のあなたにとって）面白いか?」「きつくないか?」「単位が取りやすいか（楽勝科目）?」等に集約されるのかもしれませんが。

しかし、センター試験や入学試験の真剣勝負だった頃を思い出してください。その頃「大学生活」を単なる「レジャーランド」と捉えていたのでしょうか？ 社会人になるまでの一休み（「モラトリアム」：猶予期間）なのでしょうか？

社会のどのような分野に進むとしても、いかに問題を発見し、それをどのように解決していけるか、という「企画力」は、ますます重要度を増してきました。時代がどう変わろうとも普遍的、この「企画力」を身につけることは、教育の本来の姿であり、大きな目標です。

授業計画・方法（平成23年度シラバスから抜粋）

レポート（皆さんが前期に提出してきた「レポート」群は、おそらくレポートの体を成していないと思います）の作法については、大学生活の基礎として当授業で解説していきます。

授業シラバス（実際に実施されたもの）

- 1) オリエンテーション —— 学びの出発点について
- 2) 「論じる」って何? (1) —— 広告表現（バブル経済期）から時代背景を読み解く
- 3) 「論じる」って何? (2) —— 「調べ学習」「感想文」からの脱却を!
- 4) 「論じる」って何? (3) —— ファッションから時代背景を読み解く
- 5) 「論じる」って何? (4) —— 広告表現（ジェンダー、人種差別）から時代背景を読み解く
- 6) 「論じる」って何? (5) —— 広告表現（日用品）から時代背景を読み解く
- 7) 多面的思考のトレーニング (1) —— 報道写真を読み解く（皇室、ベトナム戦争、スーダン内戦）
- 8) 多面的思考のトレーニング (2) —— 原発事故とマスメディア
- 9) 多面的思考のトレーニング (3) —— 受信側の複眼思考について（冤罪とメディア）
- 10) 多面的思考のトレーニング (4) —— インターネット（技術の進歩とモラル）
- 11) 多面的思考のトレーニング (5) —— デザインとは問題解決マネジメント
- 12) 多面的思考のトレーニング (6) —— 著作権を考える（オマージュ、パロディ、コピー）
- 13) レポートの書き方 (1) —— 何を書くか、どう書くか
- 14) レポートの書き方 (2) —— 着眼力、構成力、構築技術力
- 15) レポートの書き方 (3) —— マンガ『ドラゴン桜』から学ぶ着眼力

※2011年度は、当初は30人規模での演習スタイルを交えた講義を予定していましたが、一授業の開講に留まったためすべて講義スタイルとなりました。

成績評価の方法

レポートの成果と出席状況で診ます。3回以上の欠席は原則的に不可とします。

2. 授業の構成

美術教員が社会科を講義する

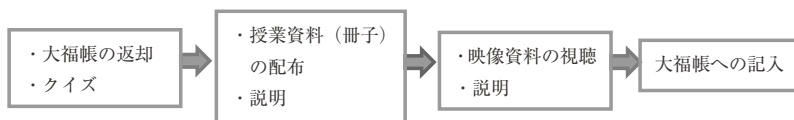
この半期間に、私が「日本の社会と表現文化（入門）」中で取り上げたテーマは「オウムサリン事件」「天皇とマッカーサー」「ベトナム戦争」「イムジン河」…など、主に社会科の内容です。

大学で美術教育の組織に属する教員が教養科目「日本の社会と表現文化」の中で、社会科の内容を講義していることに違和感を感じる人も多いと思います。なるほど、デザインは教育界での位置づけとしては美術科です。しかし、身の回りの「デザイン」概念を考えてください。デザインは表現の主体が「自己」ではなく「社会」にあります。デザインとは、社会生活のさまざまな場面での潜在的な問題を掴み、筋道を立てて課題を解決していく取り組みです。必要なのは Feeling なんかではなく Thinking。マーケティング活動（市場観察）をベースとした一連のマネージメントです。私自身は美術表現というより、社会科学と考えています。

毎回の授業

教養科目は案外、教員にとっては自己の専門の外側と捉えがちですが、むしろ自分の守備範囲のストライクゾーンと考えています。私は、愛教大に来て早10年になろうとしています。それまでの20年間は広告代理店に勤めていました。授業前日の準備は、まさに企業のプレゼンテーション時のようにワクワクしながら講義ストーリーをつくっています。毎回の配付のプリントは「企画書」の様相で、冊子状にしています。おおよそ、この冊子に沿って、時に映像を用いながら毎回、プレゼンテーションをしています。そこには大きなエネルギー源が要りますが、その燃料のモトは「大福帳」です。

〈授業の流れ〉



大福帳の使用

「大福帳」を毎回使用することで、学生の関心度や希望を把握するようにしています。「大福帳」とは、毎授業の終了直前に「授業に関する意見や感想」を受講生に記してもらったカードです。受講カードとの違いは、次週までに教員が全員に返事を書く双方向のコミュニケーションツールになっている点です。これは三重大大学の高等教育創造開発センターで15年ほど前から啓蒙されているシステムを、そのまま借用しました。カードの様式も三重大学から教えていただいた形に準じています。

※実際に授業で使用されている大福帳は富山先生のウェブサイトからダウンロードできます。

URL: http://tomiyama-stationery.com/kyouzai/pdf/daifuku_zuga.pdf

大福帳を使用する上でのポイント

「大福帳」では返事を書きますので、受講生が多いほど教員にとってはたいへんなシステムです。一人のコメントにつき10分かかります。ところが、受講学生からのお便りに励まされ、また返事を書く中から、次回の講義の工夫や、キーワードがひらめいて、次の冊子づくりの構想が湧き出てきます。これを利用して、小さな授業改善も積み重ねてこられたと実感しています。愛教大では、ぎっしりと真摯にコメントを寄せる学生がほとんどで、私の授業デザインの大きな指針となっています。



記入済みの大福帳（2011年度）

授業の導入にクイズを行う理由

大福帳を返却する際に、学生にクイズを解いてもらっています。ちょうど大福帳が配り終わる時間で、解答が終わるように問題をつくっています。学生一人一人に大福帳を手渡しで返却することで、学生全員の顔を覚えるようにしています。

クイズの内容は、教員採用試験や入社試験に出るような時事問題です。その週の、つまり金曜日から翌週の木曜日までの新聞から選んで出しています。特に点数をつけるものではないですが、答え合わせはしています。

最終レポート課題

最終レポート課題の内容は、最後から2回目の授業で学生に伝えます。A4判3枚の分量です。最終授業日に、フォーマット規定をプリントで配布しています。

〈設問〉

日本の〇〇〇について、レポートとして、論じなさい。

〇〇〇の選択肢：

「カメラ文化」「ファストフード文化」「スーパーマーケット文化」「住宅文化」

〈留意点〉

- ① 只の「調べ学習」の披露は論外とする。
- ② 受け売り（要はキリバリ）が主体のレポートも論外とする。
- ③ 個人の感想や所感（要はエッセイ）も論外とする。
- ④ 引用をする場合は、そのルールを守ること。
- ⑤ 大学生であるあなたの提起を大切にしつつ、客観的な裏付けのある論理の文章であること。受験生の小論試験ではないし、逆に研究を積んだ学者の論文ではありません。
- ⑥ あなたのプレゼンテーションとして「見た目」も大切です。

〈採点〉

絶対評価としますが、例年、相対分布の結果になっています。皆が「優」となるレポートの成果を期待しています。とくに優秀なレポートは100点を超えて採点します。欠席等の多い受講生（とくに3回を超える欠席者）は、この措置で挽回してください。

3. 授業理念と教育方法

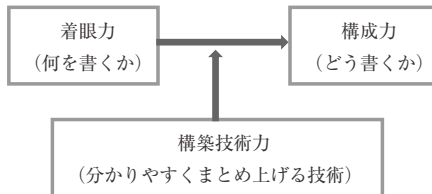
授業で身につけて欲しい力

学生には「土台力」を身につけて欲しいと思っています。「土台力」とは私の言葉で、これから物事を学び身につけていくための学びのスキル、昔で言う「読み・書き・そろばん」のような土台となる力のことです。こうした力を授業のなかで学生につけて欲しいと考えています。この力は、繰り返すだけではなく積み重ねによってつけることができます。

土台力の基礎となるのは、「着眼力」「構成力」「構築技術力」の三つです。その前提になるのが、多面的なものの見方です。多面的なものの見方ができないと着眼はできません。

土台力をどのように育むか

多面的なものの見方を伝えることが重要です。以下の図のように、着眼力をつけることから、構成力が身につきます。



「自己表現」が授業のテーマ

一番授業で伝えたいのは、自己表現をするということです。学生が表現することが最終的な到達目標です。そのためにはせつかくの大学生活の4年間なので、日々のいろんな着眼点を、いわゆる教養を身につけてくださいということです。授業の大きなテーマはこれです。

レポート課題では、学生が題目のなかから自分のテーマを発見して、その裏付けを得ることが大切です。裏付けデータというのは、テーマを発見したら割とすぐ見つかるはずですが、「あなたなりの主張を誰にでもわかるように表現すること、つまり自己表現することがレポートなんです。ですから、レポートはコピーで一夜漬で適当にやらないでね」ということを毎回言っているつもりです。

授業構築のプロセスを示す

私の講義では、授業を構築するにあたってのプロセスを話していったつもりです。「実は今日の内容っていうのはね、こういう調べ方をして、この写真をこういうふうに紐解いてお話しました」というように。自分で毎回テーマを決めて、過去のデータとか歴史の史実をベースに仮説を立てたり、検証したり、裏を取ったりしながら、授業を構築していています。学生にこのプロセスが見えてくれればいいなと思っていますが、1年生ですので学生にそれが伝わったかどうかわかりません。

着眼点を授業でプレゼンする

着眼点をどう構成するかということには、技術が要ります。大学のシラバス(平成23年度)には、こうした技術論のほうが書いてあります。受講する学生の人数が少ないと思い込んでいたので、演習形式で技術について話そうと思っていました。講義だったら技術は話せないで、こういう着眼、こういう技術で資料を集めましたという舞台裏を話していったつもりです。毎回の授業は、私の着眼点から構成されています。こういう見方もあって、こういう立場で考えましたけれど、こういう考え方もありますというのを新聞記事や映像資料で示しながら、例えば、死刑制度の問題や原発の問題などで触れたと思います。授業もプレゼンであり、授業を構築するためのプロセスそのものを、学生に体験してほしいと思っています。

自分の着眼点を示す方法=レポートの書き方

プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方など、自分で着眼点を見つけようという話は、常にしてきました。私はこういう着眼点で、この資料についてお話ししますということをしてきました。ですから、レポートの課題を出すときには、レポートは、あなたの着眼点で資料を集めて書いてください、テーマのなぞりでは駄目ですよと伝えます。結局のところ、この授業ではずっとレポートの書き方を教えてきたわけです。

講義では毎回毎回、私が自分でテーマをつけて、自分でそのプレゼンテーションをしてきましたが、今度のプレゼンテーションのプレゼンターはあなたです、それをレポートで出してねということです。ですから、毎回の授業ではテーマを最初に言って始めるわけですが、「今日のテーマは、カメラ文化、ファストフード文化、

スーパーマーケット文化、住宅文化です。今日のテーマは、私はしゃべりません。これはレポートの課題です」と伝えます。

「調べ学習」を崩す

調べ学習をやっている学生はレポートがまったく書けません。ネットの情報をそのまま書いてきたりします。豊田市内の小学校の先生たちは、「調べ学習」という言葉をやめようという運動をやっています。調べ学習は、調べるのが目的になっているのですが、そうではなく、「見つけ学習」と呼んでいます。調べて分かったことから何を見つけてどうしたいのかということが大切です。本来、調べることは糸口でなければならぬのに、学校で行われているのは、単に「調べてきました」ということだけなのです。

「調べ学習」というと、小学校ではパソコン室に生徒を連れていくそうです。調べ学習の本来の意味が分かっていない先生から習った学生は、そのようになります。ですから、愛教大の学生だったら、その意味をわかって卒業してもらわないと困るんです。「調べたね」で終わるような人が先生になったら、また、そうした学生を生み出してしまおうという繰り返しになります。この「日本の社会と表現文化入門」では、それを崩すことから始めています。

※「見つけ学習」については、次の図書を参照。

前田勝洋、実践同人たち（2007）『授業する力をきたえる：子どもをやる気にさせるワザと仕掛け』黎明書房

コピペ不可

最後のレポートも、検索結果をうまく日本語にしたところで、それは不可です。ただの調べ学習も、切り貼りも、エッセーも論外です。引用する場合は、きちんとルールを守ってねということ言うのですが、当たり前なことなんですけれど、しっかり言わないと、おそらく19歳の人たちは意味がわからないと思います。下手をすると、4年まで自己流を引きずることになります。

「繰り返し」ではなく「積み重ね」

学生には4年間、同じことを繰り返さないでねと言っています。「20年の蓄積がある」と言う人がいても、実際は1年の経験を20回繰り返しているだけだよという

ことです。ですから、大学の4年間で、1年生を4回やっただけということにならないでねと言っています。

大切なのは「守・破・離」の「守」

1年生の学生の皆さんがすべきことは「守」ですと伝えています。「守・破・離」の「守」です。俺には俺のやり方があるということを言われることがありますが、でもまず作法を身につけましょうということです。自分のやり方をするのはその次の段階です。まずは、基礎力を身につけることが必要です。

小学校で個性化教育を行うことに私は反対です。個性はまず型、基礎を身につけてからのことと考えます。基礎が身につけていれば、いつでもその型を破ることができます。破ったあとに、今度は自分がその型をつくる「離」になればいいということです。

授業では、徹底的に「守」をやりたいということです。1年生は「守」の時期で、即戦力をもった人というのは「離」です。大学生で即戦力をつけるということはありません。つまり、入社した途端にバリバリ働けるような学生はいません。ですので、企業は即戦力をもった学生ではなく、即戦力になり得る基礎力を持った学生を求めていると言えます。もし、学生で即戦力になるような人がいるんだったら、企業が大学に頭を下げてくると思いますが、現実はそうではありません。

企業人はどのような学生を採りたいか

大学教育レベルなりに、スキルを身につける習慣を持った人を企業は採りたいと思うと思います。今は特に私立大学などでは、3年生後半から4年生になったら、まったく学校へ来ないでずっと就職活動をしている学生がいます。それを自慢気に話す学生もいるらしいですが、企業の立場だとそんな学生は要りません。企業が求めているのは、学びのスキルを持っている学生です。きちんと時間を守る、きちんとタイムマネジメントができる、拙いなりにもきちんとプレゼンテーションができるということを評価します。専門性については、専門に対する学びの姿勢は期待しているけれども、専門知識は学生に期待していないと思います。

タイムマネジメントに関して言いますと、1年生の最初の専門科目の「デザイン基礎」という授業のシラバスのなかに書いたスローガンは、「時間に負けない」です。学生に習得させたい目標が「時間に負けない」ということです。1年生

の最初ですから、もうどんなことがあっても時間内に終わらせるということで、できない理由は聞かないという姿勢でやっています。

レポート課題を出すときの留意点

レポート課題を出すときには、しっかり文章で伝えるよう注意しています。学生は都合のいいふうにはレポート課題を解釈したりします。自分の都合のいいふうにはテーマを受け止めてしまうのです。ですから、しっかり文章に残しておかなければなりません。それで、だんだんと配布物が厚くなっていきました。また、レポート課題は試験問題ですので、口頭で課題を言うだけでは基準を示せないため文章化しています。最後の授業の日も学生が受講するように、2回に分けて課題の内容や形式を伝えています。

レポート評価の公開について

評価については、希望者にだけ知らせています。「レポートで講評が必要な人は申し出てください」といって、名乗り出てきた人にだけ返しています。レポートには朱書きを入れて、成績評価シートと共に返しています。講評を希望する学生は、たいがい成績がよいです。おそらく学生の心理として、よくできたものしか、怖くて要求できないのではないかと思います。授業では、よいレポートの例と悪いレポートの例をプロジェクトで映して説明しています。

レポートを採点する際、一人30分で見たとすると、一日に数人しか見ることができません。学生の全部が申し出たら、すぐには返却できなくなります。レポートの評価を請求しない学生も、ウェブ上から成績評価の内訳等の概念表は閲覧することができるようにしています。

成績評価の基準

成績評価の基準は、レポート課題を伝える際に学生にプリントとして配っています。授業では口頭で説明します。学生には「レポートとして論じなさい」と伝えています。その意味合いは、「11月21日の授業資料の2ページと、1月10日の授業資料の4ページでしっかり読んでください」ということです。論じるという意味は、「1月2日と12月2日の授業資料の何ページを読んでね」とすべて冊子の箇所を示しています。

特色として、優秀なレポートは100点超えをします。欠席等の多い受講生、特

に3回を超える受講生は、レポートで挽回してくださいと伝えています。欠席が多い人は、タイムマネジメント等が身につけていないわけですので、得てして評価は低いです。ですが、たまに例外的に良い評価を得る学生もいます。

富山先生からのメッセージ

ビジネスシーンでは、プレゼンテーションの結果が、すぐさま商品化計画のプロジェクトに発展したり、広告展開されたりします。結果をすぐに見て確かめることができます。一方、教育では、その成果は未来社会にしか存在しません。受講生も、資格試験の講座でない限り「この目的のため」といったヴィジョンは描きにくいと思います。一般教養科目では、とくにそうでしょう。

授業者としては、受講学生に何らかの思考のきっかけが生まれるといいな！といった気持ちで、この教養科目に臨んでいます。「考え方」の多様性の在り方を伝えることが使命かな！と考えています。社会に出てすぐさま役に立つ、そんな学校教育なんて在り得ない！と元ビジネスマンは思っています。

■参考資料

～富山先生の授業実践～

富山祥瑞 Stationery Site URL: <http://tomiyama-stationery.com/>

富山祥瑞（2007）「教育学部における「デザイン教育」の教育実践—問題解決型学習としてのデザイン教育を目指して—」、『愛知教育大学研究報告、芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編』第56輯、愛知教育大学、13～20頁。

富山祥瑞（2008）「図画工作・美術教育における開発教材の紹介」、『愛知教育大学教育実践センター紀要』第11号、169～172頁。

富山祥瑞（2009）「「デザイン教育」をデザインする—デザイン教育は教育学部から—」、『愛知教育大学研究報告、教育科学編』第58輯、209～215頁。

富山祥瑞（2010）「美術教育における数学からの教材展開——エッセイに挑戦」、『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第13号、147～153頁。

富山祥瑞（2010）「教員と学生の授業交流カード『大福帳』」、『SCOPE II』No.13、愛知教育大学教育実践総合センター。

～富山先生の教育への取り組み～

富山祥瑞編・著（2010）『未来の先生へ向けて—新聞学習の基礎知識』愛知教育大学出版会。

～主題科目としての「日本の社会と表現文化」～

中川洋子（2008）「主題科目の自己点検「日本の社会と表現文化」、『教養と教育：共通科目研究交流誌』愛知教育大学共通科目専門委員会。

～共通教育における取り組み～

佐藤洋一（2001）「教養の系譜—共通教育の展開に向けて—」、『教養と教育：共通科目研究交流誌』創刊号、愛知教育大学共通科目専門委員会、1～15頁。

共通科目委員会授業改善専門委員会（2002）「共通科目の授業改善のための調査報告Ⅱ」、『教養と教育：共通科目研究交流誌』第2号、愛知教育大学共通科目専門委員会、111～177頁。

共通科目委員会授業改善専門委員会（2003）「共通科目の授業改善のための調査報告Ⅲ」、『教養と教育：共通科目研究交流誌』第3号、愛知教育大学共通科目専門委員会、71～149頁。

共通科目委員会授業改善専門委員会（2004）「共通科目の授業改善のための調査報告Ⅳ」、『教養と教育：共通科目研究交流誌』第4号、愛知教育大学共通科目専門委員会、137～201頁。

共通科目委員会授業改善専門委員会（2005）「共通科目の授業改善のための調査報告Ⅴ」、『教養と教育：共通科目研究交流誌』第4号、愛知教育大学共通科目専門委員会、101～181頁。

あとがき

本書の内容は、「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクト（リベラル・アーツプロジェクト）の中に組織されたジェネリック・スキル教育ワーキンググループのメンバーで検討してきました。

今年度の活動として、学生のジェネリック・スキルを涵養する教育の充実に向けて、セミナー、ワークショップの実施と共に、文献調査・ヒアリング調査に基づき検討を進めてきました。そのなかで、今後さらに検討されるべき以下のような課題も浮かび上がってきました。

一つ目としては、特定のジェネリック・スキルを涵養するためには、課題探究型授業やディベート、議論を取り入れた授業などが有効であると言われていますが、一つの方法がすべての科目に通用するわけではないことが挙げられます。科目の特性に応じた教育方法については、共通領域の教員同士で議論を深めていく必要があります。

二つ目としては、ジェネリック・スキルの涵養のために、特に1年生には読み、書き、話すなどの学びの基礎となるスキルを、授業内容を教える中で育んでいくことが必要であるという点が挙げられます。ジェネリック・スキルは、4年間の学士課程を通して育まれるものであり、これを育んでいくための基礎を初年次において身につけることが重要です。

三つ目としては、特定の力を授業で育むカリキュラムを展開していく際には、授業をコーディネートし、担当教員にアドバイスを行う組織体制が必要であることが挙げられます。新しいカリキュラムを実質化していく上で、共通の科目を担当する教員間で検討する機会を設定したり、コーディネータ同士が共同で議論する機会を提供する体制は必須となってきます。

こうした点を含む課題については、今後もワーキングで議論・検討を重ねていきますので、本書の内容も含め、ご感想やご意見をいただきましたら幸いです。

最後に、本書の作成にあたりご協力いただきました、富山祥瑞先生、土屋武志先生、高橋真聡先生、河野哲也先生に心より御礼申し上げます。

リベラル・アーツプロジェクト研究員
久保田 祐歌

協力

- 富山 祥瑞 教授 (愛知教育大学創造科学系美術教育講座)
土屋 武志 教授 (愛知教育大学人文社会科学系社会科教育講座)
河野 哲也 教授 (立教大学文学部教育学科)

2011年度ジェネリック・スキル教育ワーキンググループ

- 大澤 秀介 (現代学芸課程国際文化コース / 社会科教育講座教授、
リベラル・アーツプロジェクト責任者)
高橋 真聡 (現代学芸課程宇宙・物質科学専攻 / 理科教育講座教授)
久保田 祐歌 (リベラル・アーツプロジェクト研究員)
満田 清恵 (教育創造開発機構運営課職員)

授業が育む学びの基礎力

～ジェネリック・スキル教育の充実に向けて～

発行日 2012年3月31日

編集 久保田 祐歌

発行 国立大学法人 愛知教育大学 教育創造開発機構
「教員養成系大学の特徴を活かした
リベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクト
(〒448-8542) 刈谷市井ヶ谷町広沢1
電話 (0566) 26-2717

印刷製本 株式会社荒川印刷
(〒460-0012) 名古屋市中区千代田2-16-38
電話 (052) 262-0014



国立大学法人 愛知教育大学 教育創造開発機構

「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクト